

2015年12月17日／浪宏友ビジネス縁起観塾／法華経の現代の実践

幸福に生きる道

1. 「苦」を感じない生き方

庭野日敬師は、次のように述べています。

「人間は、ほんとうに真理に合った正しい生き方をしさえすれば、客観的には苦のなかにあっても、それを苦と感じなくなります。天災地変にあっても動ぜず、『病もまた楽し』という心境になり、最大の恐怖であるべき死さえも『帰るべきところへ帰るのだ』という淡々とした気持で迎えることができるようになります。」（庭野日敬著『仏教のいのち法華経』佼成出版社、p. 263）

2. 人間らしい生きかた

(1) 安楽行

庭野日敬師は、妙法蓮華経安楽行品について、次のように解説しています。

「まえの《勸持品第十三》において、菩薩たちが、今後のさまざまな迫害を予想し、それにたいする覚悟をのべたのにたいして、お釈迦さまが、『いつもやすらかな心で、みずからすすんで法を説け』とお教えになり、そのための具体的な心がまえをこまごまとお説きになり、結論として、〈法華経の教えを心から信じ、身に行なえば、いかなる困難をも超越した安らかな心境にたっすることができ、色心不二の法則によって、その安らかさは身体の上にも、生活の上にもあらわれてくる〉ことを保証されるのが、この品（安楽行品）です」

（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 140~141）

いかなる困難のなかにあっても「いつもやすらかな心で、みずからすすんで法を説く」ことを、安楽行といいます。

(2) 幸福に生きる道

「法華経の教えを心から信じ、身に行う」ことを原因として「いかなる困難をも超越した安らかな心境にたっする」という結果を得ます。

「いかなる困難をも超越した安らかな心境」を原因として「色心不二の法則によって、その安らかさは身体の上にも、生活の上にもあらわれてくる」という結果を得ます。

ここから、「法華経の教えを心から信じ、身に行う」ことが、「苦を感じない生きかた」であり、「幸福に生きる道」であることが分かります。

(3) 人間らしい生きかた

安楽行は特別な生きかたではなく、ほんとうの人間らしい生きかたであることが、如来寿量品における庭野日敬師の次の解説から理解できます。

「もしわれわれが、いつも『自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ』という自覚を深くもち、『久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のとおり生きる事が正しい生きかただ』という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです。

それがほんとうの人間らしい生きかたであり、この品（如来寿量品）は、最大の要点としてこのことを教えられているのです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.169）

「ほんとうの人間らしい生きかた」が、「安楽行」であり、「幸福に生きる道」にほかなりません。

3. 八正道

(1) 八正道

「そのような正しい生き方を八つに分けて教えられたのが、〈八正道〉すなわち〈正見・正思・正語・正行・正命・正精進・正念・正定〉ということであります。」

（庭野日敬著『仏教のいのち法華経』佼成出版社p.263）

正しい生き方が八つあるのではなく、ひとつの正しい生き方（これを中道といいます）を八つの角度から見たものが八正道です。

(2) 「正」とは

「正しい」に関する、庭野日敬師の解説があります。

「そのすべてに〈正〉という字がついていますので、まずその意味からはっきりさせておく必要があります。

この〈正しい〉というのは、つまり〈真理に合った〉という意味です。

また、真理に合ったものの見方や、考え方や、行動のしかたは、必ず調和のとれたものです。ですから、正しいということには、〈調和のとれた〉という意味もあります。

また、真理に合ったものの見方、考え方、行動のしかたは、当然、必ず目的にぴったり合っています。ですから、正しいということには、〈目的に合った〉という意味もあるのです。」

（庭野日敬著『仏教のいのち法華経』佼成出版社p.263～264）

3. 正しく生きる八つの道

「その、八つの正しい道（八つの聖なる道ともいう）というのは、次のような人生の基本指針なのであります。

〈正見〉というのは、自己中心の歪んだ見方をせず、一方に片寄った見方をせず、正しくものを見なさいという教えです。

〈正思〉というのは、ものの考え方を自分本位に片寄らせることなく、常に大きい立場から、真理に照らし合わせて考えなさいということです。

〈正語〉とは、正しいことを言いなさいということです。

真理に合ったことを、目的にぴったり合った表現で言うのが、正しいものの言い方です。そして、どのような意味でも社会全体に調和する言論が正語なのであります。

〈正行〉というのは、日常の行為は正しいものでなければならないという教えです。

正しい行ないとは、天地の真理に合った、それをなそうとする目的に合った、そして周囲や社会と大きな意味で調和のとれたものをいうのです。

〈正命〉とは、衣食住その他の生活財は正しく求めなさいということです。

われわれ在家のものにたいしては、ひとの迷惑になるような仕事や、世の中のためにならぬ職業などによって生活の糧を得るのではなく、正しい仕事や、ひとのためになる職業による、正しい収入で暮らしを立てなさいと教えられているわけです。

〈正精進〉とは、自分に与えられた正しい使命および自分が目指す正しい目的にたいして、正しく励み進んで、怠ったり、わき道へそれたりしないことをいいます。

使命や目的が正しくあるべきことはもちろんですが、その実践方法も、真理に合った、目的に合った、調和のとれたものでなければなりません。そういう努力を、正精進というのです。

〈正念〉とは、仏と同じような正しい心を持ち、その心を常に、強く、正しい方向へ向けていなさいという教えです。

仏と同じような正しい心や正しい方向とは、どんなことを指すかといいますと、小我にとらわれたわがままな分別を捨てて、ものごとの実相を見ることにほかなりません。

つまりは、常に真理を見、真理を強く思うということに帰します。

〈正定〉とは、心をいつも正しくおいて、周囲の影響や環境の変化によって動揺することがないようにしなさいということです。

真理をしっかりとつかみ、すべてをその真理に照らし合わせて考え、行動するかぎり、確固たる自信が持てます。ですから、どんなことがあっても心がぐらぐらすることがありません。その状態を、〈定〉もしくは正定というのです。」

4. ふだんの生き方の指針

「この八正道は、四諦の第四である道諦を具体的に教えられたもので、仏教の教えのなかでもたいせつな法門です。いわゆる深遠な哲理などというものでなく、われわれの生活に密着した、ふだんの生き方の指針ですから、ぜひ深く心に刻んでいたいものです。」

(庭野日敬著『仏教のいのち法華経』佼成出版社 p. 266～267)

(1) 四諦における道諦

八正道は、「四諦の第四である道諦を具体的に教えられたもの」ですから、苦悩の原因を解決する方策・筋道の内容であり、これを実践すれば、苦悩が解決するのです。

(2) 生きかたの指針

八正道は「深遠な哲理」ではありません。「われわれの生活に密着した、普段の生き方の指針」です。

家庭、職場、学校、遊びなど、普通の生活のあらゆる場面における自分のあり方を、具体的に示してくれる教えです。

5. 真理を負う者は最も強い

庭野日敬師は、八正道のしめくくり、次のように述べています。

「ともあれ、この教えの全体を貫く精神は、〈真理を負う者は最も強い〉ということです。真理に合った生き方さえすれば、苦も苦ではなく、人生を正しく、強く、明るく生きることができる、という教えであります」(庭野日敬著『仏教のいのち法華経』佼成出版社 p. 267)

6. 六波羅蜜

(1) 八正道と六波羅蜜の対応

八正道を基盤としながら、対社会的な項目を強調した修行法が六波羅蜜で、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六つの波羅蜜行です。

八正道と六波羅蜜は、次表のように対応していると私は考えています。

八正道	正見	正思	正語	正行	正命	正精進	正念	正定
六波羅蜜	智慧		布施・持戒			忍辱・精進	禅定	

(2) 対社会的項目

① 六波羅蜜における、布施と忍辱は、対社会的な修行項目であることができます。

在家の修行者は社会の中で活動しますから、社会性を念頭においた修行項目は重要であると思います。

② 布施は、自分・他人・世間の幸せのためにつくす修業です。社会の中で自己実現をする修行ということもできます。

③ 忍辱は、他人や世間から誤解されたり、邪魔にされたり、迫害されたりしても、正しい道から外れない修業です。

対社会的に活動するときには、心がけておかなければならない修行であるといえます。

(3) 現代に生きる

私たちは、不安定な現代社会に生きています。

世界各地で繰り広げられている争乱。いつ襲ってくるか分からない自然災害。社会生活の中に潜む危機。不安定な政治・経済。思うようにならない人間関係。そうしたものが私たちの生活に直接・間接の影響を及ぼしています。

そうした不安定な中でも、自分・他人・世間の幸せの実現を願いながら、自帰依・法帰依（自燈明・法燈明、自洲・法洲）の精神で生きるのが、妙法蓮華経の主旨であり、中道の目指すところ。それが真の意味で「幸福に生きる道」なのです。